

日本数学会 市民講演会

藤澤利喜太郎 生誕150年

「五港育ち、『生命保険論』と『総選挙読本』」

清水 達雄（元清水建設研究所）

場所 東京大学駒場キャンパス 数理科学棟大講義室

日時 2011年5月28日 14時15分～15時15分

主催 日本数学会，共催 日本科学史学会，東京大学大学院数理科学研究科

* * * * *

藤澤利喜太郎は文久元年九月九日（1861年10月12日）生まれ，その150年後ということで，記念講演が企画され，御指名に与りました．以前に「経世家 藤沢利喜太郎」と題して『数学セミナー』誌に3回連載をしたことによります（1983年10～12月号）．私は数学科卒業のあと経済学科に学士入学し，そちらにも眼を開かれ，たまたま彌永先生の研究室の書棚内にあった『藤澤博士遺文集』，『藤澤博士追想録』に惹かれ，戴いたのでした．

さて，五港とは，最初の開港場で，まず神奈川・長崎・函館（1859年），さらに兵庫・新潟を追加し，外国奉行がおかれた．その新潟奉行所の幕臣の家に生まれ育って，英語文化を識る．小学を了え，1874年に東京に出て，東京英和学校に入り，1876年に開成学校に入るが，1878年9月に東京大学理学部となり，物理学を修業，同級3名，田中正平，田中館愛橘（1856－1952）．

地磁気測定を指導したのが，ユーイング Ewing（1855－1935），1878年に来日し1883年に帰国．たまたま1880年に，京浜地震があり，ミルン Miln（1850－1913）が，日本地震学会を創った．協力してユーイングは水平振子型地震計を考案，磁気の指導中に磁気ヒステリシスに気付いて命名し研究した．

長命だった田中館の思出，Buturigaku Omoide が，日本物理学会誌5巻6号半世紀の回顧記念号にある．

1882年に東京大学を卒業し，1883年に留学した．はじめロンドン，それからストラスブルグの新興の大学で修業，ドクトルとなる．さらに，ベルリンでクロネッカーに師事．はげましを受けて，1887年帰国．それに先立つ1886年のドイツ連邦国会の選挙で社会党が進出，その当夜の麦酒店での，質疑応答の反省から，最初の著書の『生命保険論』（1889年）が生まれた．結論の結びに，回想して，

室内当日の選挙社会党勝利の話ならざるはなし．余は椅子に腰打掛けて一盃の麦酒に咽頭を濕ふし居たりけるに，嘗つて一面識なき独逸人某氏は余が側に進み来たり，余に一礼して問ふて曰く，

「方今宇内の形勢を察するに、独逸全土を覆ふ社会党憂悒の雲は鬱然として月暗く、露国の天を望めば虚無党肅殺の気は愴然として風寒く、至るところ破壊主義のあらざるなし。…貴国破壊主義党派の名の何たるかを審にせず、幸に教示を吝むなかれ」と。余は此間の意外なるに驚きしが、考一考して答へて曰く、幸いにして弊邦には破壊主義なし、故に勿論党名なしと。…「さてさて貴国は結構なるお国柄なり」なる言葉を残して辞し去れり。…東洋の隅にも又破壊主義が暴威を逞ふするものならんと思ひたるは必ずしも無理ならず、況んや又誰か知らん。他日此推想にして実事となるなきを。

貧民の保険の実施を急ぐべし、として簡易保険の実現と発達に力を注ぐことになる。本体の生命保険料算出法に熱中したのが、開業準備中の日本生命社員、岩崎（のちに人見と改姓）米次郎で、いきさつの詳しくは『追想録』に見える。

この年 1889 年に、河合十太郎が数学科を卒業。京大の教授へ。

「遺文集」中巻末の年譜に

1890 年十一月 天谷氏屋壽子を娶る

1893 年九月 長男親雄生る

1895 年一月 二男威雄生る

藤澤はセミナー、数学演習を始めた。1896–1900 年の記録として『藤澤教授セミナー演習録』があり、2 冊目に出てくるのが、高木貞治、林鶴一、吉江琢兒。藤澤評語もあるが、高木のが、「あーべる方程式ニツキテ」。高木はドイツ留学（1898–1901）した。

1900 年、パリで国際数学会議があり、藤澤も講演した。

Note on the Mathematics of the Old Japanese School

人気は当然に、ヒルベルトの「数学の将来の問題」。

この年

1900 年七月 長女いさ子（法学士五代信厚氏夫人）生る

1905 年五月 二女さよ子（理学士左右田徳郎氏夫人）生る

五代さんのお嬢さんが 1953 年東大数学に聴講生で入学され、左右田さんは化学の教授、子息の礼典君が同科を 1950 年に卒業。

1906年 帝国学士院会員。

1907 年一月 三女ゆり子（法学士山田文雄氏夫人）生る

1910 年九月 三男秀雄生る

1912年 英国に出張。帝国学士院代表としてロンドン・ロイヤル・ソサイエチ創立二百五十年祝賀式に参列、帝国政府代表としてケンブリッジに於ける第 5 回万国数学会議に参列。これはシベリ

ア鉄道によったが、ハルビンで、平山信（星学，1888）入沢達吉（医学，1889）と合流の三人旅で「退屈しなかった」。ストックホルムではオリンピック大会が開催中で、嘉納治五郎や三島弥彦・金栗四三選手に会っている。そうしてロンドンでは女子参政権運動の熱弁をきいた。

1921年（大正11年）3月 依願免官。還暦に当たる。

この1921年11月25日

朕久キニ互ルノ疾患ニ由リ大政ヲ親ラスルコト能ハサルヲ以テ皇族会議及枢密顧問ノ議ヲ経テ皇太子裕仁親王摂政ニ任ス茲ニ之ヲ宣布ス

そうして間もなく、1923年9月1日関東大震災となる。

この頃の大きな話題に、普通選挙がある。雑誌『太陽』の『普通選挙準備号』に、藤澤が「普選に対する感想」を寄稿、選挙資格の変遷を解説、

「満二十五年以上の帝国臣民たる男子に限る」、

「納税資格は明治二十二年には十五圓，それから十一箇年後の明治三十三年にはそれが十圓に減ぜられ，更に十九箇年を経過した大正八年には急激に三圓となり，それから僅かに六箇年を経過した大正十四年には納税資格が全く撤廃せられ，次の選挙から普選が行はるることとなったのである。偕て我が國に於ける普選の最初の試みである総選挙が解散の後ちを承けて大正十六年に実施せらるるか，特に順当に大正十七年の五月十日に行はるるか，それは解からないのであるが…」

掲載号は，昭和二年一月付となっている。大正十五年が十二月二十五日で終わっての年明けの昭和二年。そして昭和三年二月二十日に最初の普通選挙が行われた。

それを踏まえての単行書「総選挙読本」だが，表題からつい略装本のように思っ，岩波書店を訪れ実際に手にしたのは，立派な書物だった。目次は「遺文集」にあつて，冒頭に挙げた「経世家…」の第3回に載せた。選挙法の解説から代議政治の進趨に及ぶが，本体は第三節の基本資料で，

三府五港を首めに置く府県の配列順には惰性的旧套の外にはこれと言ふ理由はないから，本書に於ては内閣統計局に於て用ゐてゐる，北に起こり南に終る地理的の配列順を採用した。

として，北海道第一区（札幌市，小樽市，石狩，後志二支庁）定員四人，に始まり，青森一・二，岩手一・二，宮城一・二，秋田一・二，山形一・二，福島一・二・三と進む。秋田一の首位当選は町田忠治。宮城一の首位の藤沢幾之輔は「遺文集」に同姓の人として出てくる。茨城一・二・三，栃木一・二，群馬一・二・三，埼玉一・二・三，千葉一・二・三，東京一～七，神奈川一・二・三。茨城一の首位は内田信也，栃木一の首位は森格，群馬二の4位に木暮武太夫，千葉一の3位に川島正次郎，東京一の3位に三木武吉，東京二（神田，小石川，本郷，下谷）の1位中島彌団次，2位鳩山一郎，3位安部磯雄，東京五の6位落選に加藤勘十。神奈川二（横須賀，…）2位小泉又次郎。新潟一～四，富山一・二，石川一・二，福井，山梨，長野一～四，岐阜一～三，静岡一～三，愛知一～五，三重一・二。富山二の2位松村謙三，石川一の1位中橋徳五郎，2位永井柳太郎，長野一の2位小坂順造，二の2位小川平吉，三重二の2位尾崎行雄。滋賀，京都一～三，大阪一～六，兵庫一～五，奈良，和歌山一・二。滋賀の2位堤康次郎，京都一の1位片岡直温，4位水谷長三郎，

二の3位山本宣治，大阪一の1位一松定吉，二の2位武藤山治，三の3位西尾末廣，四の1位鈴木文治，兵庫一の2位砂田重政，4位河上丈太郎，四の2位原惣兵衛，五の1位斎藤隆夫．鳥取，島根一・二，岡山一・二，広島一～三，山口一・二．岡山一の1位鶴見祐輔，二の3位星島二郎，5位犬養毅，広島二の2位宮沢裕，山口一の1位久原房之助．徳島一・二，香川一・二，愛媛一～三，高知一・二．香川一の1位三土忠造，高知一の2位浜口雄幸．福岡一～四，佐賀一・二，長崎一・二，熊本一・二，大分一・二，宮崎，鹿児島一～三，沖縄．福岡一の1位中野正剛，二の2位亀井貫一郎，熊本一の3位松野鶴平，4位大麻唯男，二の4位安達謙造，鹿児島一の1位床次竹二郎．時の流れのようなものを感じながら個人的の興味もいれて拾い出してみた．英文の **Manhood General Election of 1928** が「読本」より少し先に発表されている．訳を「数学セミナー」1988年4月号に載せた．同じ号に菊池大麓の「議員撰挙法新案」も載せてある．共存雑誌19号，明治12年(1879)に載ったものだが，ヘヤー式の紹介，夙い紹介に驚く．

『読本』は2001年6月20日に第二刷が少部数だけ出た．第三刷も期待される．

さて，「追想録」に，坂口康蔵「藤沢先生の御病氣」があり，

大正四年十一月先生は大学で講義中突然脳貧血を起してたおられたので，学生等は大に驚き先生を青山内科に担ぎ込んできた．これは胃潰瘍の為内出血を起した為であったが，その夜大出血があり一時は危険を感じる程であった．然し幸ひ間もなく病状は軽快し殆んど全治の状態で退院された．…大正十年九月御自宅で突然胃潰瘍からの出血が起り，多量の下血と吐血があり，一時は人事不省に陥られた…その後には出血も痛も格別起らず，只時として胃部に鈍痛を覚ゆるに過ぎなかったが，胃酸過多症は重く，重曹とこれを飲む為の水瓶とは外出中にも常に携帯され，人と対談中でも又汽車等の中でも屢々かなり多量に飲んで居られ，その量は毎日数十瓦以上に達して居たので，先生がその一生涯に服用された重曹の量は驚く可き大量で，先生は日本一を以て自任して居られたが，他分世界一では無いかと思ふ．

もう一つ

大正五年初めて先生を診察した時既に極めて軽度ではあるが大動脈弁閉鎖不全の症状を認めた…心臓の故障はかなり古くからあったのであるが，自覚的の症状は数年前迄は少しも無かった．御老体となり…失調の回数が重なるに連れて…昭和八年の秋には…十二月に入ってから…普通の心臓病患者に見るが如き苦悶は少しも無く，全く安らかに御永眠…これ全く先生の徳の然らしむる所と称すべきであらう．

(完)

付録1 「総選挙読本」目次

藤澤利喜太郎著

『総選挙読本 普通選挙の第一回』

岩波書店発行

目次

端し書き (1～4)

第一節 普選法成立の経過 (5～57)

普選案原案全文の漏洩

普選案立案審議の経過

衆議院議員の総数

バーデン式比例代表法の注釈

供託金

ドループ・クォータの注釈

区制

ジェリマンダリングの注釈

選挙権及び被選挙権の年齢

住所と住居

華族の戸主の選挙及び被選挙権

連座の規定

無投票当選及び推薦候補者

町村別開票

第二節 問題の所謂貧困欠格条項及び拾遺 (58～74)

貧困の爲め公費の救助を受くる者

自活の途を有せざる者

貧困の爲め公私の救恤を受くる者

生活の爲め公私の救助を受け又は扶助を受くる者

政府は両院協議会で修正の際欠格者の範囲は狭い意味のものとしてこれに同意した

両院協議会の成果

拾遺

第一回普選総選挙郵便物統計

第三節 基本資料 (75～208)

党派別の名称

候補者の議員経歴別

決定得票数

ドンド式の注釈

党派別得票数に案分すれば

府県の配列順（統計局順）

選挙区別基本資料

第四節 総選挙の結果批判

(209～248)

別表の沿革

無投票当選

党派別当選者数及び得票数（総選挙当日に於ける各候補者標榜の党派別）

得票数の統計的特色○得票数の少い例○得票数の異常に多い例○得票数接近の例

番狂わせの増減

大衆は巨象の如く歩む

地方色色彩の減退

予想を裏切った旧本党系の当選率

衆議院議員の年齢に関する研究

棄権率が少かつた原因

衆議院議員総選挙の結果諸表

第五節 党派別得票数に案分すれば

(249～277)

比例代表の種類

名簿式を徹底的に排斥すべき理由

何が故に欧州大陸諸国では名簿式が行はれてゐるか

英国に於ける比例代表論の趨勢

補正式比例代表法

党派別得票数に案分すればの決算

仮想大選挙区案分の決算

第六節 選挙干渉の統計的研究

(278～325)

北海道○青森県○岩手県○宮城県○秋田県○山形県○福島県○栃木県○千葉県○新潟県○石川県○

長野県○三重県○大阪府

兵庫県○次点者昇格に関する提案○鳥取県

岡山県○選挙干渉の効果よりも反感の方が強かった場合

広島県○愛媛県○香川県○熊本県○沖縄県

鳥瞰的観察

第七節 我が代議政治の進趨

(326～349)

二大政党の妖夢

四月五日の座談会

中立候補者

党籍変更に伴う選挙の仕直し

総選挙直後の言論界の錯覚

小選挙区還元の妄想

欧羅巴中で一番愉快的な倶楽部

衆議院の門戸解放

無産党の進出

大選挙区の頃合ひ

括 結 の 辞

追 ひ 書 き (補欠選挙)

(350~)

目 次 終 り

附 録

(355~382)

最初の普選法

* * * * *

付録2 1928年初回男子普通選挙結果の統計的考察 藤澤利喜太郎

“Statistical Investigations of the Results of the first Manhood General Election of 1928”,
Proceedings of the Imperial Academy IV(1928),「藤沢博士遺文集」下 613 - 616ページ の訳,
『数学セミナー』1988年4月号掲載)

(日本評論社の許諾を得て掲載)

1923年の12月の例会とつぎの年の正月例会で、私は比例代表のある新しい方法の特徴をこの
学士院で御披露する栄を与えられましたが、この方法は、私の信ずるところでは、いわゆる名簿式
やへやの単記移譲票のどちらよりも、はるかに合理的で、また、それゆえ、より望ましいもので、
その方法に私はのち「修正式」の名をつけました。以後、私は材料収集のどんな機会も逃さないよ
うとつめてきましたが、多分これらが仕上げと、また、同時に、私の着想を実際の選挙の結果に照
らして正当化する目的に役立ち得ましょう。今回の報告では、1928年初回成年男子選挙権総選
挙の帰結の統計的考察の諸結果の一端を述べますが、これは枝葉で主なねらいは補正式の今後の研
究にあります。

新選挙法は納税上の資格の撤廃に基づき、1925年5月5日に公布され、その時宜な参照が
Hoag, Hallet両氏の比例代表についての近著でなされておりますが、この法の概要は『アメリカ政
治科学雑誌』1926年5月号に出ております。全国はいま122の選挙区に分けられ、うち53
が三人区、38が四人区、31が五人区。そこで議席の総数は466。各有権者は移譲できない一
票をもちます。

遺憾な諸事情から、1928年2月20日に行われたその総選挙の直後に刊行された公式報告は
信用できません。当選候補者の政党所属を直す必要が見つかっています。この機会に数字の確かめ
では各候補者に与えられた票数をその本元までたどったのですが、けれども、この方面では公式報

告は何の反則も示さず、期待が外れました。

最終結果は一

| | 候補者数 | 獲得議席数 | 票数 |
|-----------|------|-------|-----------|
| 政友党 | 342 | 218 | 4,250,848 |
| 民政党 | 347 | 216 | 4,270,497 |
| 無所属 | 143 | 17 | 607,229 |
| 革新党 | 17 | 3 | 91,250 |
| 実業同志党 | 31 | 4 | 166,250 |
| 社会民衆党 | 17 | 4 | 120,044 |
| それ以外の労働者党 | 59 | 4 | 360,080 |
| 合計 | 966 | 466 | 9,866,198 |

一つの試みとして、各党に分配される議席数を選挙区ごとの党得票に比例させて算出、この際いわゆるドント式割当てを使用しました。この試算の結果はつぎの表のB欄に出ております。他方、各党に分配される議席数を党得票の合計数に比例させて算出、これを下の表のA欄に出しました。

| | 実際の議席数 | A | B |
|-----------|--------|-----|-----|
| 政友党 | 218 | 201 | 223 |
| 民政党 | 216 | 202 | 216 |
| 無所属 | 17 | 29 | 20 |
| 革新党 | 3 | 4 | 1 |
| 実業同志党 | 4 | 8 | 1 |
| 社会民衆党 | 4 | 6 | 3 |
| それ以外の労働者党 | 4 | 16 | 2 |

上の表を一瞥すれば明らかなように選挙区の大きさが現在のところいわゆる中選挙区方式で比例代表制の適用には概して小さすぎます。

非常に多くの価値あるまた、同時に、教訓的な諸性情がこんどの選挙でのその選挙結果の細心な検査を通じて認められました。これらが参照できるような日本語での単行書がじきに出ます*。

一つのことだけは、けれども、この走り書きの報告でもはぶきたくありません。さてそれは有権者中での低い棄権率です。全国での平均は、19%を、わずかに上回り。最低が鳥取県の8.5%で、最高の沖縄県の33%。ありていに言って、私は甚だ遺憾ながら記さざるをえません、この低い棄権率は、むしろ票のむき出しの買取の形をとる腐敗によるもので、人民大衆を通しての政治的良心の健全な成長によるものではないと。

当選者の総選挙時での年齢は考察の主題にされました。議席の全数は300から466に変わっているので比較のために、総選挙全部のこの関連での統計数字を共通分母466に直しました。つぎの表が1890年の初の総選挙以来の全選挙の結果を示しています。

| 総選挙 | 30歳以上40歳未満 | 40歳以上50歳未満 | 50歳以上60歳未満 | 60歳以上 |
|----------|------------|------------|------------|-------|
| 1890 | 239 | 163 | 47 | 17 |
| 1892 | 208 | 174 | 64 | 20 |
| 1894(3月) | 197 | 190 | 62 | 17 |
| 1894(9月) | 186 | 191 | 70 | 19 |
| 1898(3月) | 163 | 219 | 70 | 14 |
| 1898(8月) | 152 | 233 | 67 | 14 |
| 1902 | 124 | 234 | 92 | 16 |
| 1903 | 110 | 232 | 103 | 21 |
| 1904 | 92 | 228 | 119 | 27 |
| 1908 | 75 | 216 | 159 | 16 |
| 1912 | 67 | 213 | 154 | 32 |
| 1915 | 51 | 197 | 168 | 50 |
| 1917 | 50 | 180 | 185 | 51 |
| 1920 | 60 | 151 | 192 | 63 |
| 1924 | 66 | 176 | 178 | 46 |
| 1928 | 37 | 180 | 162 | 87 |

上の表は明らかにつぎつぎの選挙での年齢構成の上昇，すなわち衆議院議員中での年寄りの優位を示しています。大部分の人民の楽天的期待に反し，また対照的にも反対の現象が1924年の英国選挙の場合に認められ，若者の勝利としてよく特徴づけられてきましたが**，年齢構成のこの上昇が，まことに残念ながら，とりわけて初回の成年男子選挙権の場合に示されたのです。この事実は今日ただいまの政治的趨勢での沈滞の源を指し示すように思われます。

(清水達雄訳)

* 『総選挙読本』（普通選挙の第一回）岩波，1928年11月26日，菊版382ページ，参頁。

**前掲『総選挙読本』241ページ，英国議会の若手を挙げる中に，M.H.マックミラン（34歳）の名がみえる。

付録3 高木貞治著「日本の数学と藤澤博士」（『藤澤博士追想録』230～239ページ収録の初めの3段落、元『教育』第三卷第八号（岩波書店発行）所載）

予、藤澤利喜太郎は一八六一年九月九日、日本新潟に生る。信仰は仏教なり。生地の小学校に於いて初等教育を受け、後一八七四年東京に来たり、東京英語学校に入り、一八七九年同校卒業、東京に於ける帝立大学に入る資格を得る。

一八七九年、予は東京大学に入り、物理学、数学及び天文学を修め、三年の後、理学士試験に合格す。一八八三年夏、予はロンドン大学に来たり、同年十二月の終、ベルリンに移り、同地大学に入学して、一八八四年夏学期の終まで修業す。

一八八四年九月ストラズブルグに来たり、数学の研究を継続す。独逸国留学中、予が教を受けたるは、次の諸氏なり。

アロン、クリストッフエル、ヘルムホルツ、キルヒホッフ、クノオブラウフ、クロネッケル、クント、ネットオ、ライエ、ワイエルストラス、

以上の諸氏に対して、特にクリストッフエル、ライエ両教授の薫陶の恩寵に対して、予は衷心より誠意を表明するものなり。』

以上は藤澤先生がストラズブルグ大学に提出されたドクトル論文に附属の先生手記の略歴（の訳文）である。ドクトル試験は一八八六年七月にすんだのであったが、其の後先生は再びベルリン大学に若干期間を過ごされた後、明治二十年帰郷、理科大学教授に任ぜられ、数学特に解析学の講義を担任して、大正十一年三月、その成立に力を致された停年制に従って、大学を去らるる時に及んだ。

藤澤博士は夙に保険、経済、政治、社会の問題に興味を有し、特に大正十四年帝国学士院代表に選任せられてからは、其の方面に没頭せられたやうであった。自今先生の友人、門弟の手で出版されつつある遺文集に収録される筈になっている論文、邦文五十余篇、欧文三十余篇の中、大部分は上記数学以外の方面に関するものである。

先生は大正余年胃潰瘍を病み、間もなく快癒されたが、その後は胃酸過多症に悩まされていたやうであったが、まめな性分は案居を許さなかつたのであろう。常に多量の重曹を携えて随時、会議の席上などでも、ポケット・ウィスキの空瓶に入れて形態された水を以て、それを服用されるのを常に見受けたことであつた。昭和八年十二月二十三日、心臓病の為に易簣された。享年七十三である。



前に述べたように、先生は明治十五年東京大学物理学科の出身であるが、先頃雑誌「科学」に掲げられた先生の同窓の親友なる田中館博士の東京大学一ツ橋時代の追想談によつても分かるように、当時の物理学科というものは、今から見れば数、星、物、合併の創業時代の一学科であつたのである。明治十六年に藤澤先生が数学研究の為に海外留学を命ぜられたのは、分化された数学科の創立が大学に於いて計画されて、創立の重責が先生に擬せられた為であらうと思われる。前記の略歴にもあるように、先生は渡欧の当座、しばらくロンドンのユニヴァシチ・コレジに居られ、間もなく独逸に移つて、当時振興のストラズブルグ大学でクリストッフエル、ライエ、クント等の下でみっちり勉強して、明治十九年にクリストッフエルの所でドクトル試験通過の後、暫くベルリンで、特

にクロネッケルを聴かれたようである。これは筆者の想像であるが、クリストッフェルあたりの示唆で、ストラスブルグに於ける修業の補充をする意味があったのではなかろうか。クリストッフェル、ライエ、それからクロネッケルの下で先生の数学修業が完成せられたのであろう。これは立派な修業過程である。

曾て外の所でも述べたことだが、日本の大学に数学科を創立する大任を負わされた先生として、上記の留学過程が如何にも機宜に適したもので、そうしてそれが日本の数学の為に甚大なる幸福をもたらしたのであったことを、今更ながら筆者はつくづく感ずるのである。

明治十年代の日本、又十九世紀の八十年代の欧羅巴というものを念頭に置かなくては、認識困難であろうが、当時先生が、ずっと英国に留まられたのでは勿論いけない。独逸へ移っても始めからベルリンに留まるのも、必ずしも適当でなかったかも知れない。当時の日本留学生として、小じんまりながら、新鋭であったストラスブルグほど適切な留学地は想像されない。ストラスブルグで眼を開いた後にベルリンを覗いて帰るなどは、もしもそれが計画であったならば、実に理想的なる計画と言わねばならない。これは筆者の独断かも知れぬが、事後から見て正に斯くの如くの通りである。

藤澤先生よりも前に、西洋数学は勿論輸入されていた。蘭学式の洋算は姑らく置くとして、それはイギリス流、フランス流、ドイツ流等々、悪口を言えば語学式数学であった。実質的には高々微分積分法の概念に過ぎない。そのような当時の日本へ、クリストッフェルの函数論、ライエの射影幾何学、それからクロネッケルの代数学、その他多くを土産に持って「新人藤澤」が帰って来られて、その御蔭を以て、当時に於いて時代錯誤的にならざる、偏狭ならざる、世界的の「全数学」が日本に移植されたのである。日本の数学に取ってこれは重大で、将来編まるべき新日本数学史上の一つの契点であらねばならない。

明治時代は勿論日本新文化の創業時代であったから、明治の新人は誰でもパイオニーヤとして、働いているのに不思議はない。藤澤博士の場合、先生は一生を通じてその活動の各部局に於いて、パイオニーヤの精神を以て終始されたというべきであろうと、筆者は思ふ。

○

本誌のためには、普通教育の数学に関する藤澤博士の事績を述べるのが、むしろ適当であろうと思われるが、不幸にして筆者はその方面に於いて充分の資料を知識とを持ち合わせない。筆者の手に届く所の資料は、前にも述べた遺文集中のそれに関する両三篇の論文、その他では曾て万国数学会議に関係して設けられた国際数学教育報告委員会、所謂 IMUK の本邦委員として書かれた「日本数学教育の概括的報文」Summary Report on the Teaching of Mathematics in Japan (明治四十五年発行、文部省、非売品) とだけである。これは報文というても、今度読んで見ると、先生自身の意見がむしろ主調を成しているように感ぜられた。これらに依って、藤澤博士の中等教育の為の算術教科書について少しく述べて見た。それが日本の中等教育に於いて画期的であったことは周知であろう。

先ず最初に先生の主張の契点ともいふべき所を述べるのが適当であろう。普通教育に於いて第一に必須なるものは、昔ながらの「読み書き、そろばん」であって、「算術」はその「そろばん」に外ならない。従ってそれは各国の国情、乃至国民性と言ったものを基礎とすべきである。現今ならばそれは当然であるが、明治の二十年代には事情が全く違っていたようである。「そろばん」は丁髷と共に斬捨てられた。その跡の荒蕪知地へ洋算を移植しようという所で、例のイギリス流は英国

の教科書そのままの、ややこしい度量衡や貨幣の制度の為に余儀なくされた諸等算などを無批判に輸入して、日本の山村、漁村の学童までポンド、シリング、ペンスの換算に時間と脳力との浪費を強いていた。それが洋算というものであって、それを絶対的のもの、サンスクリットだか、パリだかの呪文見たように思って平気でいたのであった。それらとは別に、或は若干それに対抗して(?)、フランス流というのがあった。所謂、理論的と称せられたもので、整数論や不尽数の片割れ、論理的なるフランスの国民性というのか、パリのリセイあたりには適当かも知れないようなことを、やっぱり明治二十年頃の日本の山村、漁村の学童に押し付けることを理想的と信ずるかの如く見える一派もあった。これらの荒蕪地の光景である。ここでも時代はパイオニーヤの鋤を要求していたこと、明白である。それは日本の国情及び国民性に基本を置く所の算術の創立であらねばならない。

上記、遺文集中のそれに関する論文及びイムク (IMUK) の「概括報文」中に散見する所によれば、藤澤博士は既に帰朝早々の明治二十一年頃から文部省の講習会又は理科大学に臨時附設された簡易講習科などに関係させられて、中等教育の数学に関心を有すべく余儀なくされたように思われる。その結果として、先生の算術教科書が発表されたのは約十年後の明治三十年頃であったのは、先生の堅実真摯なる性格の顕れである。

(以下略)

付録4

藤澤利喜太郎先生年譜

- 1861 (文久元) 年 新潟生
- 1876 (明治 9) 年 東京開成学校に入学
- 1878 (明治11) 年 東京大学理学部に入学 (物理学, 数学及び天文学を修める)
- 1882 (明治15) 年 理学士試験に合格し理学士, 東京大学予備門判任教諭
- 1883 (明治16) 年 夏, 留学, 始めはロンドン大学, 12月の終りにベルリン大学に入学し, 翌年夏学期の終まで修業
- 1884 (明治17) 年9月 シュトラスブルグ (Strasbourg) 大学に移り数学の研究を継続
- 1886 (明治19) 年7月 博士試験通過, 学位論文題名「熱伝動論に現れる, 超越方程式の根により展開される無限級数について」, その後再びベルリン大学で修業
- 1887 (明治20) 年 5月帰国, 6月 (帝国大学) 理科大学教授就任, 解析学の講義担当
- 1890 (明治23) 年 尋常中学校教員講習会委員
- 1891 (明治24) 年 理学博士 (総長推薦), 教員検定試験委員 (大正10年迄)
- 1896 (明治29) 年 法科大学において統計学を講義
- 1897 (明治30) 年9月 尋常中学校教科細目調査委員 (明治41年4月迄)
- 1899 (明治32) 年 理学文書目録編纂委員 (明治44年迄)
- 1900 (明治33) 年8月 第2回万国数学者会議 (パリ) に出席
“Note on the mathematics of the old Japanese school” という題で講演
帰国後, ヒルベルトの23の問題など報告を書く
- 1906 (明治39) 年 帝国学士院会員
- 1910 (明治43) 年 数学教科調査委員会会長
- 1911 (明治44) 年 郵便保険年金の仕事に従事
- 1912 (明治45) 年 帝国学士院代表としてロンドン=ロイヤル=ソサイエティー創立250年祝賀式に参列, 第5回万国数学者会議 (ケンブリッジ) に出席
- 1919 (大正 8) 年 東京帝国大学理学部長事務取扱を命ぜられる
東京帝国大学理学部において数理統計学を講義
- 1920 (大正 9) 年 勲一等瑞宝章を受章, 学術研究会議会員, 中央統計委員会委員
- 1922 (大正11) 年 東京帝国大学退職 (翌年3月まで講師として講義継続)
- 1924 (大正13) 年 文政審議会委員
- 1925 (大正14) 年 帝国学士院代表として貴族院議員に選任せられる
- 1932 (昭和 7) 年 帝国学士院代表として貴族院議員に再選, 学術振興会理事,
法制審議会臨時委員
- 1933 (昭和 8) 年12月23日, 73歳で逝去